

カンボジアにおける初等教員養成校の学生を対象とした 体育授業観の形成過程に関する事例研究

— 被教育体験期と初等教員養成カリキュラムに着目して —

山平芳美

(2020年10月5日受理)

A Case Study of the Formation Process of Views of Teaching in Physical Education among
Students at a Teacher Training College in Cambodia

— Focus on educational experiences and curriculum for provincial teacher training college —

Yoshimi Yamahira

Abstract: This study aimed to shed light on the process by which views of teaching in physical education are formed in Cambodian students at the Provincial Teacher Training College (PTTC) from their years before admission to classroom experiences at a teacher training college. Twelve PTTC students were interviewed and the resulting transcripts were reviewed using qualitative analysis. Consequently, four key findings were summarized. First, PTTC students were influenced by school sports and sports activities to form their views of teaching in physical education. Second, in teaching practice, PTTC students' views of teaching in physical education were formed as they surveyed the condition of children during class and appreciated their pedagogical roles through their exercises. Third, PTTC students' views of the formation process of teaching physical education were affected by the timing of the class of teaching practice. Finally, first-year students' view of teaching physical education was partially formed by their relationships with second-year upperclassmen.

Key words: Physical Education Teaching Methods, Teaching Practice, M-GTA

キーワード：体育科教育法，教育実習，修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ

1. 研究の背景

1978年にUNESCOによって「体育・スポーツ国際憲章」が採択され、1991年の改訂を経て、2015年に「体育・身体活動・スポーツに関する国際憲章」として継承された。この「体育・身体活動・スポーツに関する国際憲章」に沿った中学校体育科教育学習指導要領を

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：齊藤一彦（主任指導教員）、沖原 謙、
小山正孝、岩田昌太郎

策定した国が、本研究で対象としたカンボジア王国(以下、カンボジア)である(Hearths of Gold, 2017)。

カンボジアの学習指導要領策定の歴史を遡ると、2006年から2016年の約10年間、国際協力機構(Japan International Cooperation Agency: JICA)における草の根技術協力事業草の根パートナー型として、小学校保健体育科指導要領^{注1)}と教師用指導書の作成、完成した小学校保健体育科指導要領と教師用指導書を活用した小学校体育授業の普及体制の構築が展開されてきた。カンボジアにおける小学校体育授業の普及は、一定の成果がみられながらも、「未だ全ての小学校で年間76コマの体育授業を全学年が実施するまでに至っ

ていない」(木村・山平, 2019, p.89)との報告もみられる。実は、このような現状はカンボジアに限定されたことではない。Hardman (2014) は、全世界の体育授業の実施率は71%に留まっていることを明らかにしており、体育授業が実施されない理由の1つに、校長や教師が体育に無関心であることを指摘している。つまり、体育授業における授業行動に変化がみられないと捉えられる。その点について、小野(2012)は、開発途上国において教師の授業行動が変わらないことは、驚くべきことではないという。この教師の授業行動が変わらない理由として、「授業は文化的な営みであり、何よりも教師の間で広く共有されている価値観・信念(授業観・教師観・生徒観)に深く根ざしている」(小野, 2012, p.213)ことが考えられよう。

この授業に関する価値観や信念は、日本において教師の授業の力量形成の課題に基づいて検討されている(木原・村上, 2013; 岩田, 2017, p.155)。開発途上国においても教師の力量不足について指摘されており、その要因の1つに教員養成の課題が挙げられている(萩原, 2013)。カンボジアでも同様に教員養成の課題は先行研究で指摘されている(e.g., 安藤, 2013; 平山, 2014; Khlok, 2001)。カンボジアでは、教員養成の課題改善に向けて、持続可能な開発目標(Sustainable Development Goals: 以下, SDGs) 4. 1^{注2)}や4. c^{注3)}の目標達成に貢献することを目指し、JICAによる技術協力事業としてカンボジアの教員養成大学設立のための基盤構築プロジェクトが展開されている(JICA, 2016)。

上述したカンボジアにおける小学校体育授業の現状と体育授業における教師行動や教員養成の課題背景を踏まえ、山平ら(2020)は、カンボジアの初等教員養成校(Provincial Teacher Training College: PTTC)の学生を対象とした体育に関する授業観^{注4)}(以下、体育授業観)について検討を行っている。ここでは、PTTCの学生を対象に、PTTC入学直後と初等教員養成カリキュラムの一部である体育科教育法受講後における体育授業観について調査した。その結果、カンボジア小学校保健体育科指導要領の目的・目標に関連した授業観と学習指導に着目した授業観と2つの様態を保持していたことが明らかとなった。

体育授業観といった価値観については、教科の指導法のみならず教育実習など含め横断的に検討することが求められている(江藤, 2019)。また、Pajares (1992, p.326)によって、「教えることについての信念は、生徒が大学に入学する頃にはできあがってしまう」といった報告もなされている。しかしながら、山平ら(2020)が明らかにしたカンボジアにおけるPTTCの

学生の体育授業観は、初等教員養成カリキュラムでも体育科教育法という一定の期間でありかつ教員養成と段階も限定されている。

そこで、本研究では、カンボジアの学生が初等教員養成校入学以前から教員養成段階において、どのように体育授業観を形成^{注5)}しているのか、その過程について明らかにすることを目的とした。

2. 研究の方法

2.1. 調査対象者の選定

調査対象者は目的のサンプリングによって選定された。Patton (1990, p.169)は目的のサンプリングについて、「情報量豊かなケースとは、調査目的に対して核心的な重要性を持った論点を、そこから多く引き出せるケースをさす」と述べている。

Doolittle et al. (1993)は質的研究を通して、教員養成段階の学生は、被教育体験期における経験と大学のカリキュラムに基づいて信念を形成していくことを明らかにしている。Matanin & Collier (2003)も、教員養成段階の学生の信念について調査し、教員養成段階の学生の信念は過去の経験が影響していると指摘している。嘉数・岩田(2013)は、教育実習後に、教員養成段階の学生から授業の実践を通して授業を想定した体育授業観の新たな表出がみられたことを明らかにしている。また、嘉数・江藤(2014)は、教科の指導法に関する科目の受講前後における教員養成段階の学生の体育授業観について調査し、結果として学生の体育授業観は受講前後での変容^{注6)}はみられなかったとしている。これらの先行研究から、教員養成段階の学生を対象とした体育授業観の形成について検討する際、第1に、教員養成段階の学生の過去の経験である被教育体験期に基づく視点、第2に、大学の講義や教育実習といった教員養成のカリキュラムの視点からの検討が肝要であろう。

第1の被教育体験期に基づく視点として、カンボジアでは、現在の教員養成の学生が児童の頃、カンボジアにおいては体育授業が軽視されていた現状であったという(大橋・小原, 2008)。したがって、被教育体験期における体育授業について把握するために、質問紙を介して体育授業を受けた、受けていない、覚えていないで回答してもらった。その上で目的のサンプリングとして、1) 被教育体験期に体育授業を受けた経験あるいは受ける機会に恵まれてなかったが明白であること、2) PTTCの体育科教育法(前期)、教育実習、体育科教育法(後期)を全て受講あるいは参加済みであること、の2点を選定基準とした。調査対象者は、

X 州 PTTC 2 年次学生 12 名で、調査対象者については表 1 に示した通りである。なお、1) 被教育体験期に体育授業を受けた場合は○、受ける機会に恵まれなかった場合は×で示している。

表 1 調査対象者

学生	初等教育 体育授業	前期中等教育 体育授業	後期中等教育 体育授業
ST1	○	○	○
ST2	×	○	○
ST3	×	○	○
ST4	×	×	×
ST5	○	○	○
ST6	×	○	○
ST7	×	○	○
ST8	○	○	○
ST9	×	○	○
ST10	×	○	○
ST11	○	○	○
ST12	○	○	○

2. 2. インタビューの調査内容

分析データは、調査対象者への半構造化インタビューによって収集された。PTTC 1 年次の体育科教育法（前期）、教育実習、体育科教育法（後期）を受講あるいは参加後の 2019 年 12 月末に実施された。面接の際は、表 2 の質問事項をクメール語で記したインタビュー・ガイドを参照しながら質問を実施した。

インタビュー・ガイドは、3 つに大別された転機（山崎、2002）と、それを参考に小学校教師の体育授業観の形成について検討している木原・村上（2013）を基に作成した。山崎（2002, pp.18-19）は、教師の「力量形成上の転機」に着目し、「転機」を 1) 出来事、2)

時期・時機、3) 境遇・状況の 3 つに大別して論考している。山崎（2002, p.11）は、教師の成長を「養成段階のみならずそれ以前と入職後までも含めた生涯にわたる広がり」と捉え、大学入学までの被教育体験期、教員養成段階も含めて教師の力量形成を事例的に検討している。したがって、本研究の目的である、初等教育段階における学生の体育授業観の形成という視点においても枠組みとして援用することが可能であると考え、1) 出来事、2) 時期・時機、3) 境遇・状況、の 3 つを用いることとした。

インタビュー調査は、筆者がクメール語でインタビューを行い、1 名あたり約 30 分であった。録音されたインタビューは、逐語録化しテキスト・データとした。筆者のバイアスを避けるため、インタビュー結果は、カンボジアにおける教育開発の通訳を 14 年間継続的に実施しているクメール語-日本語の通訳者と調整が行われた。

2. 3. インタビューの分析の手続き

テキスト・データは、木下（2003）により提唱された修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Modified-Grounded Theory Approach：以下、M-GTA）を用いて分析した。木下（2003, p.158）によれば、「そこに反映されている人間の認識、行為、感情、そして、それらに関係している要因や条件などをデータにそくしていいに検討していく」と M-GTA について述べている。本研究では、分析テーマを 1) 被教育体験期における体育授業観の形成過程、2) 初等教員養成カリキュラムを通じた体育授業観の形成過程、の 2 つを設定した。また、分析焦点者を「初等教員養成カリキュラムを通して 1 年間学んだ学生」とした。

表 2 インタビュー・ガイド

1. 被教育体験期における体育授業について
・小学校から高等学校の体育授業でどのような学びがありましたか。
・小学校から高等学校の体育授業で、何か印象に残るような出来事はありましたか。
・何か印象に残る出来事があったとすれば、小学校、中学校、高等学校のどのような時期・時機に、その印象に残る出来事が起こりましたか。
・小学校から高等学校までの体育授業で、何か印象に残る出来事があったとすれば、それはどのような状況でしたか。
2. 初等教員養成校における体育科教育法（前期）について
・体育科教育法（前期）は、どのような講義でしたか。
・どのような学びがありましたか。
・何か印象に残るような出来事はありましたか。
・印象に残る出来事があったとすれば、どのような時期・時機に、その印象に残る出来事が起こりましたか。
・何か印象に残る出来事があったとすれば、それはどのような状況でしたか。
3. 教育実習について
・教育実習で、どのような体育授業を行いましたか。
・教育実習で、体育授業をする際、何を参考にしましたか。
・教育実習から、どのような学びがありましたか。
・教育実習で、何か印象に残るような出来事はありましたか。
・教育実習で、印象に残る出来事があったとすれば、教育実習のどのような時期・時機に、その印象に残る出来事が起こりましたか。
・教育実習で、何か印象に残る出来事があったとすれば、それはどのような状況でしたか。
4. 初等教員養成校における体育科教育法（後期）について
・体育科教育法（後期）は、どのような講義でしたか。
・どのような学びがありましたか。
・何か印象に残るような出来事はありましたか。
・印象に残る出来事があったとすれば、どのような時期・時機に、その印象に残る出来事が起こりましたか。
・何か印象に残る出来事があったとすれば、それはどのような状況でしたか。

分析作業は、NVivo12 (QSR International 社) を用いて以下の手順で実施した。

第1に、テキスト・データをよく読み込み、分析テーマと関連する部分に着目して文章として抽出し、具体例として記入した。次に、具体例を包括的に表す文章を定義とし、その定義を凝縮したことを概念名とした。分析ワークシートは、概念ごとに作成した。具体例を記入する際の疑問点やアイデア、新しい概念の解釈や疑問に関する気づきは、理論的メモ欄に随時記入した。分析ワークシートは紙幅の都合上省略している。この段階で、複数の調査対象者から具体例が抽出できなかったものは、概念として不成立とした。

第2に、分析ワークシートに記入された各概念の関係性や類似性に着目して、複数の概念を包括するカテゴリを作成した。そのカテゴリから分化が可能な場合は、カテゴリの下位に位置付くものとしてサブカテゴリを作成した。その後、概念、サブカテゴリ、カテゴリの関係を図にまとめた。分析の妥当性と信頼性を高めるため、分析ワークシートの具体例、定義、概念名、また概念をサブカテゴリ、カテゴリとして位置付ける際、「分析結果が創出されるたびに、同僚の意見を求める」(メリアム, 2004, p.298) 仲間同士での検証を、スポーツ国際開発学を専門とする大学教員4名で行った。

2.4. 倫理的配慮

本研究は、X州PTTC校長ならびに体育科教育法を担当している体育教員に本研究の目的と趣旨、研究の方法、個人情報の保護について説明し、承諾を得て実施された。調査対象者には、研究への参加は自由であること、本研究の目的以外には使用しないことを、口頭ならびにクメール語の同意書で確認した。

3. 結果

3.1. 被教育体験期における体育授業観形成過程について

表3は、分析テーマ1) 被教育体験期における体育授業観の形成過程に関する概念、サブカテゴリ、カテゴリと、どの学生から生成された概念かをまとめた一覧である。分析テーマ1) では、9つの概念、3つのサブカテゴリ、2つのカテゴリで構成された。テーマ1) に関する各概念と代表的な具体例は紙幅の都合上省略している。以下、概念を< >, サブカテゴリを[], カテゴリを【 】で示す。

被教育体験期における体育授業に関するカテゴリを【学校体育】とした。サブカテゴリは、[初等教育段階の体育授業]、[前期・後期中等教育段階の体育授業]の2つであった。[初等教育段階の体育授業]は、小学校でどのような体育授業だったのかを示し、<小学校体育の問題>, <用具不足に配慮された小学校体育>, <小学校における情意面に着目した体操>の3つの概念が含まれる。[前期・後期中等教育段階の体育授業]は、中学校と高等学校でどのような体育授業だったのかを示し、<中等教育段階以降の学び>, <陸上競技や球技中心の中学校体育>, <体操, 陸上競技, 球技中心の高校体育>の3つの概念が含まれる。そして、被教育体験期に起きた出来事として<体育授業中の怪我>という1つの概念である。

被教育体験期の学校教育における体育授業以外に関するスポーツ活動のカテゴリを【学校スポーツ】とした。サブカテゴリは、[前期・後期中等教育段階の学校スポーツ]の1つにまとめられ、<中学校の学校スポーツ>と、<高校の学校スポーツ>の2つの概念が含まれる。

表3 被教育体験期における体育授業観の形成過程に関する概念・サブカテゴリ・カテゴリの一覧

カテゴリ	サブカテゴリ	概念	調査対象学生												該当者	
			ST 1	ST 2	ST 3	ST 4	ST 5	ST 6	ST 7	ST 8	ST 9	ST 10	ST 11	ST 12		
初等教育段階の体育授業	小学校体育の問題	用具不足に配慮された小学校体育		●		●				●					●	4
		小学校における情意面に着目した体操							●		●				●	3
		体育授業中の怪我				●									●	2
学校体育	前期・後期中等教育段階の体育授業	中等教育段階以降の学び	●	●						●				●	4	
		陸上競技や球技中心の中学校体育	●	●						●				●	4	
		体操, 陸上競技, 球技中心の高校体育							●		●			●	3	
学校スポーツ	前期・後期中等教育段階の学校スポーツ	中学校の学校スポーツ				●	●							●	3	
		高校の学校スポーツ						●			●				2	
		概念数	2	3	2	2	1	2	3	3	2	3	3	2		

3. 2. 初等教員養成カリキュラムを通じた体育授業観の形成過程について

表4は、分析テーマ2) 初等教員養成カリキュラムを通じた体育授業観の形成過程に関する概念、サブカテゴリー、カテゴリーと、どの学生から生成された概念かをまとめた一覧である。分析テーマ2) では、30の概念、9つのサブカテゴリー、4つのカテゴリーで構成された。分析テーマ2) に関する概念と代表的

な具体例は紙幅の都合上省略している。分析テーマ1)と同様に、概念を< >, サブカテゴリーを[], カテゴリーを【 】で示す。

初等教員養成カリキュラムに示された、体育科教育法(前期)に関することを【体育科教育法(前期)】とした。サブカテゴリーは、[体育科教育法(前期)の内容],[体育科教育法(前期)の目標]の2つであった。[体育科教育法(前期)の内容]は、PTTCの学

表4 初等教員養成カリキュラムを通じた体育授業観の形成過程に関する概念・サブカテゴリー・カテゴリーの一覧

カテゴリー	サブカテゴリー	概念	調査対象学生												該当者
			ST 1	ST 2	ST 3	ST 4	ST 5	ST 6	ST 7	ST 8	ST 9	ST 10	ST 11	ST 12	
体育科教育法(前期)	体育科教育法(前期)の内容	体操と球技を中心とした学び	●		●									●	3
		ウォーミングアップ・クーリングダウンとスポーツの学び		●		●			●			●	●	●	6
	バスケットボールにおける情意面と協調性		●	●		●	●	●	●		●	●	●	9	
	2年生と協働の活動	●			●	●				●	●			5	
	体育科教育法(前期)の目標	技能の獲得と認識	●								●		●	3	
		経験の獲得			●			●						2	
体育授業の内容	運動会種目を中心とした体育授業	運動会種目を中心とした体育授業	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	11
		球技を中心とした体育授業										●	●	●	3
	反復指導ではない情意面に着目した体育授業		●		●							●	●	4	
	雨天時に行う体育授業				●	●	●						●	4	
	体育教員の助言と指導書											●		●	2
他者との関わり	上級生の助言、指導書、実体験	●	●	●	●	●	●	●	●				●	9	
	小学校教師による助言						●						●	2	
教育実習プログラム	教育実習第1段階の実践	教育実習第1段階の実践		●	●	●	●	●	●	●	●		●	●	8
		教育実習第2段階の実践	●					●			●	●			4
	ポジティブな児童イメージとネガティブな児童イメージの共存			●					●	●	●			4	
	ネガティブイメージの児童に対する対応	●				●								2	
児童の様相への気づき	児童の様相から得られる体育授業の認識		●								●			2	
	児童の積極的な参加と情意目標の達成		●	●				●	●	●	●	●		8	
	用具や種目に興味を示す児童					●	●			●				3	
教師の役割の認識	教育実習生主導の体育授業									●	●	●	●	4	
	自信の構築			●				●						2	
体育科教育法(後期)	体育授業の準備段階	体育授業の準備段階				●							●	●	3
		バスケットボールのドリル練習、試合、復習	●		●	●	●	●	●	●	●		●	●	10
	ウォーミングアップ・クーリングダウンや体操と球技の復習		●	●					●			●		4	
	器械運動の講義										●		●	2	
	講義中の安全面と協調性					●						●		2	
	体育教員の印象	●					●	●				●		4	
	体育科教育法(後期)の目標	球技と器械運動の技術の向上	●					●					●	3	
スポーツ活動	初等教員養成校におけるタフなスポーツ交流				●						●	●		3	
概念数			10	8	11	10	11	12	10	12	10	12	15	10	

生が学習したことを示し、〈体操と球技を中心とした学び〉、〈ウォーミングアップ・クーリングダウンとスポーツの学び〉、〈バスケットボールにおける情意面と協調性〉、〈2年生と協働の活動〉の4つが含まれる。[体育科教育法(前期)の目標]は、PTTCの学生が講義を通して身に付けたことを示し、〈技能の獲得と認識〉、〈経験の獲得〉の2つの概念が含まれる。

初等教員養成カリキュラムに示された1年次の教育実習に関することを【教育実習】とした。サブカテゴリーは、[体育授業の内容]、[他者との関わり]、[教育実習プログラム]、[児童の様相への気付き]、[教師の役割の認識]の5つであった。[体育授業の内容]は、PTTCの学生が教育実習中に行った体育授業の内容で、〈運動会種目を中心とした体育授業〉、〈球技を中心とした体育授業〉、〈反復指導ではない情意面に着目した体育授業〉、〈雨天時に行う体育授業〉の4つの概念が含まれる。[他者との関わり]は、PTTCの学生が教育実習で体育授業を実施する際に参考にしたことやアドバイスを受けたことで、〈体育教員の助言と指導書〉、〈上級生の助言、指導書、実体験〉、〈小学校教師による助言〉の3つの概念が含まれる。[教育実習プログラム]として、PTTC 1年次では第1段階が3週間、第2段階が3週間の計6週間設けられており、〈教育実習第1段階の実践〉と〈教育実習第2段階の実践〉の2つの概念が含まれる。PTTCの学生が体育授業を実施し把握した「児童の様相への気付き」として、〈ポジティブな児童イメージとネガティブな児童イメージの共存〉、〈ネガティブイメージの児童に対する対応〉、〈児童の様相から得られる体育授業の認識〉、〈児童の積極的な参加と情意目標の達成〉、〈用具や種目に興味を示す児童〉の5つの概念が含まれる。PTTCの学生が教育実習の体育授業を経験して獲得した「教師の役割の認識」として、〈教育実習生主導の体育授業〉、〈自信の構築〉、〈体育授業の準備段階〉の3つの概念が含まれる。

初等教員養成カリキュラムに示された、体育科教育法(後期)に関することを【体育科教育法(後期)】とした。サブカテゴリーは、[体育科教育法(後期)の内容]、[体育科教育法(後期)の目標]の2つであった。[体育科教育法(後期)の内容]は、PTTCの学生が体育科教育法(後期)で学習したことを示し、〈バスケットボールのドリル練習、試合、復習〉、〈ウォーミングアップ・クーリングダウンや体操と球技の復習〉、〈器械運動の講義〉、〈講義中の安全面と協調性〉、〈体育教員の印象〉の5つが含まれる。[体育科教育法(後期)の目標]は、PTTCの学生が講義を通して身に付けたことで、〈球技と器械運動の技

術の向上〉1つの概念が含まれる。

初等教員養成カリキュラムには示されていないスポーツ活動や交流に関することを【スポーツ活動】とした。〈初等教員養成校における夕方のスポーツ交流〉の1つの概念が含まれる。

3.3. 概念・サブカテゴリー・カテゴリー間の関係

表3と表4の概念、サブカテゴリー、カテゴリー間の関係は結果図として図1に示した。そして、出来事による影響、時機・時機による影響、境遇・状況による影響をそれぞれ矢印で示した。

4. 考察

4.1. 出来事

本研究では、体育授業観の形成過程をテーマとしており、インタビュー・ガイドもその内容で構成されている。表3から12名中5名が〈中学校の学校スポーツ〉あるいは〈高校の学校スポーツ〉に関する出来事について述べている。ST4は、印象に残っている出来事を以下のように述べている。

「一番楽しい出来事は、中学校時代から高校、中学校から高校で、年間を通じた代表となる2チームのサッカーの試合です。中学校1年生、2年生、3年生、中学校1年生から高校3年生まで、中学校と高校別々に表彰があります。その代表チームはX州都である代表戦に進むことができるので、皆で協力したり、もめ事もないように、自分の応援するチームをサポートしたり、応援するのが楽しみでした。」(ST4)

被教育体験期における印象に残る出来事として上記の通り回答している。すなわち、PTTCの学生は、被教育体験期において、【学校体育】のみならず、【学校スポーツ】の影響を受けながら体育授業観を形成してきたのではないかと考えられる。藤谷・前林(2005, p.90)はカンボジアにおける中等教育段階のスポーツ教育の調査を踏まえ、「カンボジアではクラブ活動と授業の区別が明確に行われていないことが窺える」と述べている。つまり、PTTCの学生も同様に、【学校スポーツ】の出来事が強く影響し、体育授業観が形成されている可能性があると考えられる。加えて、初等教員養成段階においても、〈初等教員養成校における夕方のスポーツ交流〉の出来事が、[体育科教育法(前期)の内容]と[体育科教育法(後期)の内容]に影響を与えている。PTTCにおいても同様に、【スポーツ活動】による影響を受けながら体育授業観を形成している学生も一部存在するというところであろう。

また、【体育科教育法(前期)】における〈バスケットボールにおける情意面と協調性〉や〈2年生と協

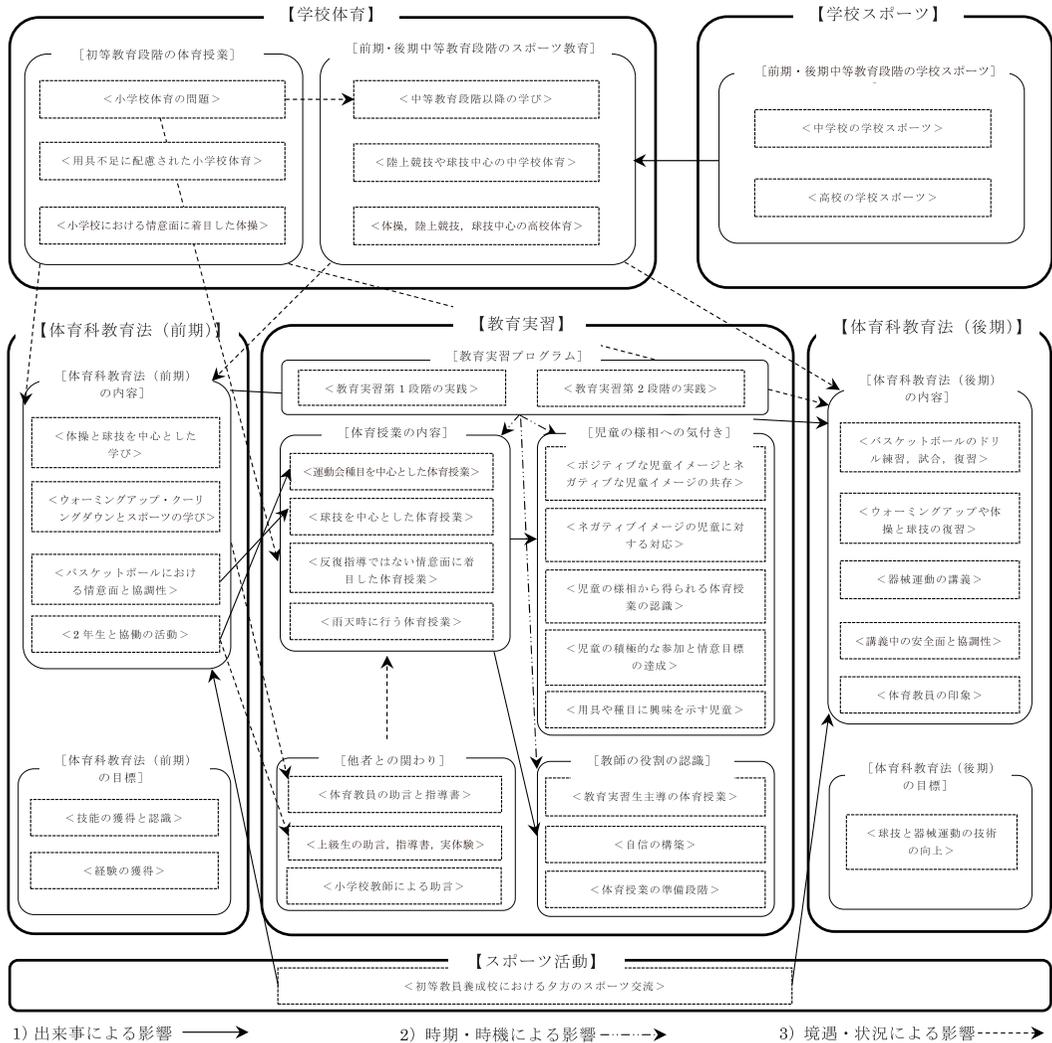


図1 概念・サブカテゴリー・カテゴリー間の関係

働の活動」の出来事が、【教育実習】の「体育授業の内容」に影響していることが明らかになった。そして、学生12名は【教育実習】において、体育授業を行ったことにより、「児童への様相への気づき」あるいは「教師の役割の認識」のいずれかについて述べている。つまり、教師としてどうあるべきかという教師観や児童の実態としての子ども観も同時に形成していったと考えられる。三島(2008)は、教育実習生の授業・教師・子どもイメージを検出し、授業・教師・子どもの3者のイメージが密に関係していることを明らかにしている。本研究でも、とりわけ教育実習におけるPTTC学生の体育授業観は、体育授業中の児童の様子や、体育授業を通じた教師の役割との関わりを持ちながら形

成されていたのではないかと推察される。

そして、【体育科教育法（前期）の内容】の出来事が、【体育科教育法（後期）の内容】に影響している点について、ST9は、<バスケットボールのドリル練習、試合、復習>で以下のように述べている。

「後期では、先生の講義は、もう一度復習するような感じで指導して下さいました。体育科教育法の時に先生はバスケットボールのコートの所にいらっしやっていて。それで体育科教育法があるのですが、よく出来る学生に先生が声をかけるので、その学生はみんなの前に出て来て、その学生が手本をみせるような感じの授業でした。」(ST9)

カンボジアの初等教員養成カリキュラムは、体育科

教育法（前期）、教育実習、体育科教育法（後期）の順序で構成されており、教科の指導法の間に教育実習が位置付く構造となっている。しかしながら、対象者のインタビューで【教育実習】を踏まえた【体育科教育法(後期)】の出来事に関する回答はみられなかった。したがって、[体育科教育法（後期）の内容]は、【教育実習】の出来事よりも[体育科教育法（前期）の内容]の出来事の方が、体育授業観の形成に影響を及ぼしていると考えられよう。

4. 2. 時期・時機

時期・時機について、【教育実習】で印象に残っていたことに関する時期・時機を、12名全員が明確に回答していた。ST7は、教育実習で印象に残っている出来事の時期・時機について以下のように述べている。

「私は1年生なので、教育実習は3週間あります。3週間が2回です。それから、1週目は授業観察です。なので、2週目になります。2週目の1年生を担当したときになります。」(ST7)

調査対象となったPTTC 1年次の[教育実習プログラム]は、1週目が観察、2週目以降が実践となっている。残り3週間は担当する学年が代わり4週目が観察、5週目以降が実践となっている。とりわけ、12名全員が授業を担当する「実践」の週を時期・時機として回答しており、【教育実習】でも体育授業観の形成には実践の時期・時機が影響していることがわかる。

ところで、佐藤・西村(1978)は、日本の教育実習生は、授業の観察を通して授業観が変容することを明らかにしている。しかし、カンボジアのPTTCの学生の場合、体育授業観の形成において観察の影響がみられなかった。したがって、PTTCの学生の場合、体育授業観の形成において、教育実習における授業の観察の在り方は今後の課題として挙げられるであろう。

4. 3. 境遇・状況

まず、分析テーマ1)に着目する。<小学校体育の問題>や<用具不足に配慮された小学校体育>の境遇・状況について、ST12は以下のように回答している。

「小学校では先生(男性)が、私に徒競走を主に教えて下さいました。なんでかという、特に、小学校には用具が不足していました。そうした状況では、色々な遊びとかもしますが、そういう状況では、そうした色々な遊びとか体操とか、徒競走だけでした。それが小学校の体育の授業でした。」(ST12)

このような境遇・状況は、<中等教育段階以降の学び>に影響を与えていたと考えられる。また、ST12の回答にみられるように、初等教育段階では体操などが繰り返し行われていたことがわかる。大橋・小原

(2008)も、小学校では体操中心の体育授業であることを報告している。しかし、<小学校体育の問題>や<用具不足に配慮された小学校体育>の境遇・状況を踏まえ、【教育実習】では<反復指導ではない情意面に着目した体育授業>としての影響がみられる。つまり、被教育体験期における体育授業の境遇・状況が、教育実習における体育授業の内容に影響していたとも考えられる。

次に、分析テーマ2)に着目する。<2年生と協働の活動>で構築された境遇・状況から、[他者との関わり]としてPTTCの上級生から[体育授業の内容]の助言を受けている。ST6は、以下のように回答している。

「一緒に寝泊まりしている先輩です。どうしてかという、教育実習から帰ってくるのが夕方なので、先生に質問したくても難しいので。」(ST6)

それと同時に、[体育科教育法(前期)の内容]を指導しているのは、PTTC体育教員であるため、<体育教員の助言と指導書>として、PTTC体育教員からの助言を受けている学生も存在した。この[他者との関わり]について、深見・木原(2004)は主に「指導教員や他の教員、他の実習生のことを指す」としている。さらに、授業観は[他者との関わり]として指導教員が指摘することで変容することが明らかになっている(深見・木原, 2001)。PTTCの学生の場合、表4から、12名中9名が上級生との関わりについて回答しており、体育の指導教員に加え、上級生との関わりが体育授業観の形成に影響していると推察される。

5. まとめ

本研究は、カンボジアの学生が初等教員養成校入学以前から教員養成段階においてどのように体育授業観を形成しているのかその過程について明らかにすることを目的とした。本研究の成果として、以下の5点に集約できる。

- 1) PTTCの学生は、被教育体験期において、【学校体育】のみならず、【学校スポーツ】の影響を受けながら体育授業観を形成してきたことが明らかになった。また、PTTCにおいても同様に、【スポーツ活動】による影響を受けながら体育授業観を形成している学生も一部存在した。
- 2) PTTCの学生は、教育実習において、体育授業中の児童の様子や、体育授業を通した教師の役割との関わりを持ちながら、体育授業観を形成していた。
- 3) PTTCの学生は、体育授業観の形成において、

教育実習の実践の時期・時機が影響していた。

- 4) <小学校体育の問題>やく用具不足に配慮された小学校体育>の境遇・状況を踏まえ、【教育実習】では<反復指導ではない情意面に着目した体育授業>としての影響がみられた。
- 5) 上級生との関わりが、PTTCの学生の体育授業観の形成に影響していると示唆された。

本研究の成果を踏まえ、今後の課題として、3点について述べておきたい。

- 1) PTTCの学生の場合、体育授業観の形成過程において、教育実習における授業の観察の在り方が今後の検討課題である。
- 2) PTTC 2年次あるいはPTTC卒業後の小学校教師として、どのように力量形成がなされるのかという長期的な職能開発として、今後の体育授業観について検討されなければならない。
- 3) 学校や地域社会との関わり、あるいはPTTCの教員や上級生、教育実習先の小学校教師、保護者といったPTTCの学生の周辺側からの調査も必要であると考えられる。

本研究は、カンボジアの初等教員養成段階に限定されたものである。カンボジアが抱える教員養成の課題解決に向けた、一示唆に繋がれば幸いである。

【注】

- 1) 小学校に関しては、カンボジア王国小学校保健体育科指導要領として作成されている (Hearts of Gold, online)。
- 2) SDGs 目標4. 1は、「2030年までに、すべての子どもが男女の区別関係なく、適切かつ効果的な学習成果をもたらす、無償かつ公正で質の高い初等教育及び中等教育を修了できるようにする。」(U N, 2015, p.17) と掲げられている。
- 3) SDGs 目標4. cは、「2030年までに、開発途上国、特に後発開発途上国及び小島嶼開発途上国における教員養成のための国際協力などを通じて、視覚を持つ教員の数を大幅に増加させる。」(U N, 2015, p.17) と掲げられている。
- 4) 嘉数 (2013, p.3) の体育授業観による先行研究を踏まえ「(1) どのような授業を目指しているか、(2) どのような授業をよい授業と考えているか、(3) どのような授業の実現に価値を見出しているのか」として論考している。
- 5) Tillema (1998, p.220) は、信念の形成と信念の変容を区別すべきであるとし、「信念の形成は個人の歴史的発展の過程で階層的に整理されてい

く」と捉えている。本研究においては、学生の被教育体験期から初等教員養成校までの期間と体育授業観について検討する場合、形成を用いることとする。

- 6) Tillema (1998, p.220) は、「信念の変容は、知識の構築に付随している」と述べている。本研究では、教員養成カリキュラムにある教科の指導法や教育実習と体育授業観を検討する場合、変容を用いることとする。

【文献】

- 安藤雅之 (2013) カンボジアにおける初等教育の現状と教員養成の課題. 常葉学園大学研究紀要. 教育学部, 33 : 63-89.
- 朝倉雅史 (2016) 体育教師の学びと成長 : 信念と経験の相互影響関係に関する実証研究. 学文社 : 東京.
- Doolittle, S. A., Dodds, P., and Placek, J. H. (1993) Persistence of beliefs about teaching during formal training of preservice teachers. *Journal of Teaching in Physical Education*, 12 (4), 355-365.
- 江藤真生子 (2019) 小学校体育授業の指導観の変容に関する事例研究 : 養成段階の学生を対象とした教科の指導法に関する講義に着目して. *日本教科教育学会誌*, 42 (3) : 83-94.
- 藤谷智啓・前林清和 (2005) カンボジアのスポーツ教育における現状と課題に関する調査研究 : 中等教育を中心に. *身体運動文化論叢*, 4 : 79-97.
- 深見俊崇・木原俊行 (2001) 授業イメージの変容 : 教育実習生に対する事前・事中・事後のインタビュー調査を通して. *日本教育工学会大会講演論文集*, 17 : 793-794.
- 深見俊崇・木原俊行 (2004) 他者との関わりによる教育実習生の実践イメージの変容. *日本教育工学会論文誌*, 28 (1) : 69-78.
- Hardman, K. (2014) *World-Wide Survey of School Physical Education: Final Report*. Paris: UNESCO.
- Hearts of Gold (online) 小学校体育科教育支援 : http://hofg.sakura.ne.jp/archive/sport/pecurriculum_jp2006.pdf (参照日2020年3月13日)
- Hearts of Gold (2017) ハート・オブ・ゴールド通信 vol.36 : <http://hofg.sakura.ne.jp/archive/hgtsushin/newsletter36.pdf> (参照日2020年3月13日)
- 平山雄大 (2014) カンボジアの初等教員養成カリキュラムの質的向上に関する一考察 : 教科指導法を巡る諸課題を中心に. *学術研究. 人文科学・社会科学編*, 63 : 151-166.

- 岩田昌太郎 (2017) 教科教育の教師教育研究. 日本教科教育学会編, 教科教育研究ハンドブック: 今日から役立つ研究手引き. 教育出版: 東京. p.155.
- JICA (2016) 事業・プロジェクト事業評価: https://www2.jica.go.jp/ja/evaluation/pdf/2016_1600198_1_s.pdf (参照日2020年3月13日)
- 嘉数健悟 (2013) 教員養成段階における体育授業観の様態に関する事例研究: 教育実習を中心にして. 広島大学大学院博士論文: p.3.
- 嘉数健悟・江藤真生子 (2014) 体育教師志望学生の授業観の様態に関する研究: 「教科の指導法に関する科目」の授業前後に着目して. 九州体育・スポーツ学研究, 28 (2): 1-11.
- 嘉数健悟・岩田昌太郎 (2013) 教員養成段階における体育授業観の変容に関する研究: 教育実習の前後に着目して. 体育科教育学研究, 29 (1): 35-47.
- 木原成一郎・村上彰彦 (2013) 体育授業の力量形成に関する一考察: 小学校教諭Aのライフヒストリーにおける体育授業観を中心に. 学校教育実践学研究, 19: 247-258.
- 木村寿一・山平芳美 (2019) カンボジア王国における運動会に関する意識調査: プレア・シハヌーク州初等教員養成校の学生を対象に. 国際武道大学研究紀要, 35: 89-97.
- Khlok Vichet Ratha (2001) カンボジアの教師教育に関する一考察: 制度的な発展と養成基準. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要. 教育科学, 48 (1): 57-70.
- 木下康仁 (2003) グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践. 弘文堂: 東京.
- Matanin, M. and Collier, C. (2003) Longitudinal Analysis of Preservice Teachers' Beliefs About Teaching Physical Education. *Journal of Teaching in Physical Education*, 22 (2), 153-168.
- メリアム, S. B. 著, 堀薫夫・久保真人・成島美弥訳 (2004) 質的調査法入門 教育における調査法とケース・スタディ. ミネルヴァ書房: 京都.
- 三島知剛 (2008) 教育実習生の実習前後の授業観察力の変容: 授業・教師・子どもイメージの関連による検討. *教育心理学研究*, 56 (3): 341-352.
- 萩原崇世 (2013) カンボジアの「子ども中心」の教授法改革に対する教師の反応: 改革が内包する矛盾と教師の主体性に注目して. *比較教育学研究*, 47: 79-99.
- 大橋美勝・小原信幸 (2008) カンボジアの国と体育事情. *岡山大学教育学部研究集録*, 138 (1): 11-17.
- 小野由美子 (2012) 教師教育とジェンダー. 菅野琴・西村幹子・長岡智寿子編著, *ジェンダーと国際教育開発: 課題と挑戦*. 福村出版: 東京.
- Pajares, M. F. (1992) Teachers' Beliefs and Educational Research: Cleaning up a Messy Construct. *Review of Educational Research*, 62 (3), 307-332.
- Patton, M. Q. (1990) *Qualitative Evaluation Methods*. (2nd ed) Thousand Oaks, Calif.: Sage, p.169.
- 佐藤裕・西村清巳 (1978) 教育実習生の授業技術の変容過程と指導観の変容態様についての研究. *体育学研究*, 23 (2): 121-128.
- Tillema, H. H. (1998) Stability and Change in Student Teachers' Beliefs about Teaching. *Teachers and Teaching: theory and practice*, 4 (2), 217-228.
- U N (2015) Resolution adopted by the General Assembly on 25 September 2015: https://www.un.org/en/ga/search/view_doc.asp?symbol=A/RES/70/1 (参照日2020年3月1日)
- 山平芳美・木村寿一・齊藤一彦・白石智也 (2020) カンボジアの初等教員養成段階における体育授業観の様態に関する研究: 特に「体育科教育法」受講前後の変容に着目して. *運動とスポーツの科学*, 25 (2): 71-84.
- 山崎準二 (2002) 教師のライフコース研究. 創風社: 東京.